宇都宮地方における蠅の生態学的研究 (I) 昭和 27 年度における蠅の季節的消長 倉茂 好雄

Kurashige, Y.: Ecological studies on the
flies in Utsunomiya District (I) Seasonal
prevalence of flies during 1952

昭和 27 年 6 月 7 日より 12 月 3 日まで宇都宮地方における蠅の季節的消長を調査した。調査の方法は魚の臓物を餌とした金網製蠅取器を宇都宮市内の一魚店に設置し原則的に毎週 1 回蠅を採集した。採集した蠅は *Ophyra*, *Fannia*, *Graphomyia*, *Muscina*, *Musca*, *Calliphora*, *Chrysomya*, *Lucilia*, *Sarcophaga* の 9 属で、採集総数は不明なものを除き 7,059 匹であつた。最も多いのは *Lucilia* の 50.77 % であつて、*Calliphora* の 14.83 %, *Sarcophaga* の 12.37 %, *Ophyra* の 11.08 % がこれについて多く、以下 *Fannia* 4.93 %, *Muscina* 4.16 %, *Musca* 0.88 %, *Chrysomya* 0.65 %, *Graphomyia* 0.33 % の順である。又 *Sarcophaga* を除いた 6,186 匹について雌の割合をみると 79.39 % であつて、何れも雌の方が多かった。季節的消長を全体の蠅についてみると、6 月から 7 月にかけて大きな山があり、7 月から 8 月にかけて一度減少し、再び 8 月から 9 月にかけて小さい山が見られる二山性を示した。この消長を属別にみると、*Ophyra*, *Lucilia*, *Sarcophaga* は大体これに類似しているが、*Calliphora* は 6 月に最高の山と 9 月から 10 月にかけて再び大きい山を示すが、7 月下旬から 8 月下旬までは全く見られなかつた。これに反して *Fannia*, *Muscina*, *Musca* は 6 月から 7 月にかけて一山を示すだけであつてその後は極めて僅かに出現したが、*Musca* は 11 月中旬まで見られた。*Ophyra* では *O. leucostoma* と *O. nigra*, *Fannia* では *F. canicularis* と *F. scalaris* とがそれぞれ同様な季節的消長を示し、相伴うて出現したが、*leucostoma* は *nigra* より、又 *canicularis* は *scalaris* より一般に優勢であつた。*Calliphora* では *C. grahmi* が常に圧倒的に多く *Calliphora* のほとんど大部分を占めているのであつて、初夏に最高の山を、秋にもかなり大きな山を示したが、*C. vomitoria* はこれと反対に初夏よりはむしろ晩秋において比較的大きい山を示した。*Lucilia* でもヒロズキンバエ群の方がキンバエ群より常に優勢であつて、前者は 6 月から 7 月にかけて、又 8 月から 9 月にかけて共に大きな山を示したが、後者は 6 月から 7 月にかけて多く出現し一山を示すのみであつて 8 月から 9 月にかけては出現が少く山は見られなかつた。

[宇都宮大生物]

墓地に於ける蚊族撲滅の新方法について (第 2 報)

大利 茂久

Ori, S.: A new control method for
the larvae of Aedine mosquitoes at
graveyard in Nagasaki City

第 1 報に於て墓地に棲息する蚊族の撲滅に、各容器の満水時水量 100 cc に対し 0.2 cc の割合で、30 % DD T 乳剤の 6 倍及び 30 倍稀釈液を夫々週一回と、月一回の 4 実験区についての実験成績から、6 倍稀釈液月一回法が最も経済的、且つ効果的であり、11~12 月にかけて越冬幼虫に対し第一回、春先越冬卵の孵化時に第二回目の注入を行うことを計画したが、更にこれを確立するために、28 年度は全市の墓地に本方法を実施し、前年同様に幼虫、成虫の調査を行つた。例えば、整茶屋墓地では 12 月 4、5 日に第一回、2 月 11、12 日に第二回を実施、以後 1 カ月に一回の予定であつたが作業の都合上 1.5~2 カ月に一回の割合で注入したが、7 月 1 日にヒトスジシマカ 3 個体、9 月 22 日に同じく 2 個体の成虫を採集したのみで幼虫の発生は全期間を通じ完全に見られなかつた。又、寺町墓地では 11 月 19 日に第一回、3 月 18 日に第二回、以後 1.5~2 カ月の割合で注入したところ、成虫は 5 月 26 日に 1 個体、以後各週の調査時に 2、3 個体ずつ採集されたが、幼虫は 8 月の盆直後の一つの容器に弱令幼虫を発見したのみである。而も発生した幼虫は成長し得なかつた点から考えると上記成虫の飛来は隣接民家か、或はこの地区に特に多い老木の樹穴に発生したのではないと思う。次に寺町墓地内の A 実験区では 11 月 18 日に一回、3 月 17 日に二回目を注入して以後幼虫が発生するまで注入を行わず観察したところが、成虫は 5 月下旬頃より 2、3 個体ずつ採集された。而し幼虫は 7 月 22 日に初めて一つの容器に発生を見た。又、B 実験区では 11 月 18 日に一回だけ注入したところが、成虫は 5 月中旬より採集され幼虫は 6 月 9 日に初めて発生を見た。これらの幼虫の発生は対照区と比較すると、越冬卵の孵化とは考えられず明らかに新生成虫の産卵した卵から出た幼虫と考えねばならない。理論的には、そして想像的には墓地に発生する蚊族に対しては、冬期間中に只一回の注入を実施すれば、その撲滅は可能である筈であるが、徹底を期するために晩冬幼虫と春先の越冬卵の孵化期に対し注入を行い以後、蚊族の出盛期と思われる 6、7 月に一回、又、墓場の諸容器に一勢に注水される盆後に一回注入を行えば充分な効果を期待し得る。

[長大風研・長大衛生・長崎中央保健所]